

## メンタル・スペース理論と過去・完了形式：日本語 と韓国語の対照

曹, 美庚

広島修道大学人間環境学部：助教授：日韓対照言語学、異文化コミュニケーション論

<https://hdl.handle.net/2324/6055>

---

出版情報：2003-06-30. 広島修道大学総合研究所  
バージョン：  
権利関係：

## 第3章 未実現事態に用いられる完了形式

### 第1節 はじめに

一般に、日本語と韓国語の「タ」「ㄷ」<sup>1)</sup>は、すでに実現した事態に対して用いられ、過去・完了を表す。これらが未実現の事態に対して用いられると不適切な文になる。しかしながら、こうした一般的用法からすると不適切となる文が、現実の発話のなかで見受けられることがある。

本章では、この種の用法の实在を指摘するとともに、未実現の事態に用いられる「タ」「ㄷ」形が、いかなる環境のもとで出現しやすいのか、その際日本語と韓国語の間で許容度に何らかの相違が認められるのか否かを考察していく。

一つの見方として、未実現事態について語る発話の中で「タ」「ㄷ」形が許容されるのは、発話時点までの確信や判断に基づいて、話者がその事態の完了を心的に認識した結果であるとの解釈が可能である。このように、話者の認識が言語表現としての「タ」「ㄷ」形を具現するという側面を、以下ではメンタル・スペース理論を援用した「心的パーフェクト」の概念を用いて解釈したい。

### 第2節 アンケート調査（曹 [1995]）からの知見

曹 [1995] において、一般的に過去・完了を表すとされる「タ」「ㄷ」の言語表現が、まだ実現していないが近未来に実現しうる事柄に対して用いられる特殊な現象を取りあげ、そのような言語現象の抽出・分析を行った。

現象の抽出・分析に当たっては、両言語それぞれにおいて、近未来時に実現しうる状況設定を提示したアンケート調査を行った。調査実施対象及びサンプル数は、日本語表現の判断については、関西と関東の男性と女性それぞれ

れ20人ずつで合計80人を調査対象としている。韓国語表現の判断については、ソウル・釜山・大邱の三つの地域の男性と女性を40人ずつ合計240人を調査対象としている。このアンケート調査から、日・韓両言語の間には、「タ」「ㄹ」の使用頻度や使用状況及び許容度に相違があることを明らかにし、その結果について語用論的側面からの解釈を行った。

アンケートの質問は、大きく、一般的な確信と関わるもの（例えば、「これは勝ったぞ」）、話者の意志決定に関わるもの（例えば、「私はうどんに決めた」）、完成直前のもの（例えば、「バスが来た」）に分かれている。まず、確信の項目については、基本文と「ぜったい」のような副詞の修飾を受けている文、「～タも同然だ」により想定空間が同一化できるもの、時間副詞との関連などを調査した。決定の項目については、具体的意味を持つ動詞（例えば、「うどん食べた」「窓側に座った」）と抽象性の高い動詞（例えば、「うどんにした」「窓側を取った」）の間で許容度の相違を調査した。そして、完成直前の項目については、完成度（限界達成度）の身近さによる制限を調査している。

このアンケート調査の結果、近未来のことに対して、話者は事態の完成点に視点を移し、主観的判断として心理的に完了を認める結果として発話に完了形を導いているとの解釈がなされた。分析のそれぞれの項目において、未実現事態に用いられる完了形式は、日本語より韓国語のほうが一般的に許容度が高く、語用論的に安定していることを示した。日本語の場合も、情報が正しく厳密で、かつその量が多ければ、完成を認めやすくなり、完了形が導かれやすいことがわかった。調査結果のまとめと許容度の比較を提示すると、表3-1のようになる。

さらに曹 [1995] では、今後の研究課題として、この種の実例のさらなる収集と「タ」「ㄹ」が未実現事態に用いられるこうした現象に対する理論化、さらには一般の過去・完了の「タ」との統一的説明の必要性などが提示された。これらの研究課題に直接取り組むことが本章の主目的である。

### 第3節 未実現事態に用いられる「タ」と「ㄹ」

表3-1 心的完了に用いられた「タ」「ㄹ」の許容度の比較

項目 (質問項目数)	日 本 語				韓 国 語			
	●	○	△	-	●	○	△	-
確信 (253/254)	21 ( 8.3)	32 (12.6)	70 (27.7)	130 (51.4)	122 (48.0)	83 (32.7)	40 (15.8)	9 (3.5)
決定 (55/57)	19 (34.5)	10 (18.2)	5 ( 9.1)	21 (38.2)	22 (38.6)	21 (36.8)	14 (24.6)	- ( 0 )
完成直前 (36/38)	9 (25.0)	9 (25.0)	12 (33.3)	6 (16.7)	30 (78.9)	8 (21.1)	- ( 0 )	- ( 0 )

注)

- 1) 「●, ○, △, -」は、統計資料で用いられたもので、評価単位である。この表のそれぞれの質問に対する評価の概略を知るためのものであり、欄の数字は与えられた評価単位の個数を示す。
- 2) 評価単位の内容は次の通りである。ただし、5段階評価を行っているため、評価値の上限は5.0である。  
 ●：大変高い評価として、平均値が4.0以上のものに与えられる。  
 ○：高い評価として、平均値が3.3以上4.0未満のものに与えられる。  
 △：普通評価として、平均値が2.3以上3.3未満のものに与えられる。  
 -：平均値が2.3未満のものに与えられる。
- 3) 項目欄の ( ) は、(日本語の質問項目数/韓国語の質問項目数)を示す。
- 4) 評価欄の ( ) は、当該評価単位の占める%を表す。

### 第3節 未実現事態に用いられる「タ」と「ㄹ」

日本語の「タ」と韓国語「ㄹ」の用法は基本的なところにおいて概ね一致しており、その用法はいずれも過去・完了を表す。たとえば、下記の例を見てみよう。(1)の「タ」「ㄹ」はいずれも、現在からきりはなされた過去(発話時以前の状況)における事柄を表し、(2)のそれは、現在と結びついた過去(完了)を各々表す(鈴木 [1976])。一方、(3)は未来に実現するもので、発話時にはまだ成立していない事態を表すために、「タ」「ㄹ」が許されない不適切な文となる。

(1) a 昨日田中さん来た?

いや、来なかった

第3章 未実現事態に用いられる完了形式

- b 어제 다나카씨 왔어?                      아니, 안 왔어.
- (2) a 田中さん (もう) 来た?                      いや, まだ来ていない
- b 다나카씨 (이제) 왔어?                      아니, 아직 안 왔어.
- (3) a \*明日田中さん来た?                      来るでしょう
- b \*내일 다나카씨 왔어?                      오겠죠.

次に、以下の(4)~(7)の例を見てみよう。

- (4) (やくざ映画の一場面で, ボスを裏切った人の頭にボスの銃がつき付けられている)
- a ああ, もう, \*死んだか。/死ぬか。( \*殺されたか。/殺されるか。)
- b 아아, 이제, 죽었구나. / 죽는구나. ( 죽었구나. / 죽는구나.)
- (5) (ひびの入った花瓶を見て)
- a \*割れたぞ。/割れるぞ。
- b 깨졌네. / ? 깨지네.
- (6) (倒産しかかっている状況を見て)
- a これじゃ, \*落ちぶれたな。/落ちぶれるな。
- b 이제, 망했구나. / 망하는구나.
- (7) (花瓶を割った友達に向かって)
- a お前, もう, \*叱られたぞ。/叱られるぞ。
- b 너 이제 혼났어. / 혼난다.

日本語の場合は「タ」は許容されないが、韓国語の場合はまだ実現していない事態であるにもかかわらず「였」が許容されている。こうした違いは、動詞のもつ意味性質と両言語における語用論的相違に関連しているものと思われる。この点に関しては第5節, 第6節, および第7節において検討する。

未実現事態に「였」が許容されるのは、一見、韓国語特有の現象のように

第3節 未実現事態に用いられる「タ」と「있」

見えるが、よく注意を払って観察すれば、韓国語だけでなく日本語においても同様の現象が見受けられる。次の(8)から(15)を見てみよう。

- (8) (登山で遭難したが、レスキュー隊のヘリコプターが見えた時)
- a あ、たすかったぞ。
  - b 아, 살았다.
- (9) (特別に企画した正月番組が視聴率を独占できると確信を持ったスタッフ)
- a 正月はもらったぞ。[95年12月, 毎日放送の正月番組案内から]
  - b 설날은 (설날 시청률은) 말아 놓았다.
- (10) (阪神は苦手になっているヤクルトと対戦している。阪神はここ数年ヤクルトに勝ち越しを許しており, 逆転勝ちの試合は殆どない。9回裏, 9対1でヤクルトにリードされているのを見て…)
- a あ、これで今日も負けたな。
  - b 아, 오늘도 졌다나.
- (11) (どしゃぶりの雨を見て)
- a これで(もう)明日の遠足は台無しになったな。
  - b 이제 내일 소풍은 망쳤다.
- (12) (9枚のボードの投げ抜き競争で, ヤクルトの捕手古田が4枚を抜いたとき, まだ投げてもない競争相手の大洋の OB 投手遠藤に対して, 遠藤の友人が) [96.11.2.毎日放送, 筋肉番付 STRUCK OUT]
- a もう, 遠藤, やられたな。やらないで帰れよ。
  - b 엔도, 이제 틀렸어 (걸렸어/뒀다 뒀어). 집어치우고 그만가 거라.
- (13) (3枚を投げ抜いたヤクルトの飯田が, 競争相手の村田が最初から2枚を続けて抜くのを見た時点で…〈しかし, 最後は結局, 村田は2枚で終わり, 3枚を抜いた飯田が勝つ〉) [96.11.2.毎日放送,

筋肉番付 STRUCK OUT]

a ああ、これ、負けたな。

b 아아, 이거 졌구만.

- (14) (ヤクルトの古田が7枚目をぬいたとき、まだ投げていない競争相手大洋のOBピッチャー斉藤が) [96.11.2.毎日放送, 筋肉番付 STRUCK OUT]

a もう、決まったな。勝ち目ないです。

b 벌써 결정났군. 이기기는 틀렸어.

- (15) (キックターゲットで9枚のうち3枚をゲットした後、2回失敗が続いたところで、ジュビロのダウンガが) [97.4.6 毎日放送, 筋肉番付番外編]

a もう、終わったな。やめた。

b 이제, 끝났네. 포기했어.

以上はいずれも、未実現事態に対して「タ」「ㄹ」形が使われた発話であり、これらに共通しているのは、事態の進行と完了に対する話者の確信や判断など、何らかの話者認識が働いていることである。それでは、話者は一つの事態をどのように認識しているのだろうか。次節ではその話者認識のプロセスを考察し、それとの関連でメンタル・スペースと心的パーフェクトの概念を展開する。

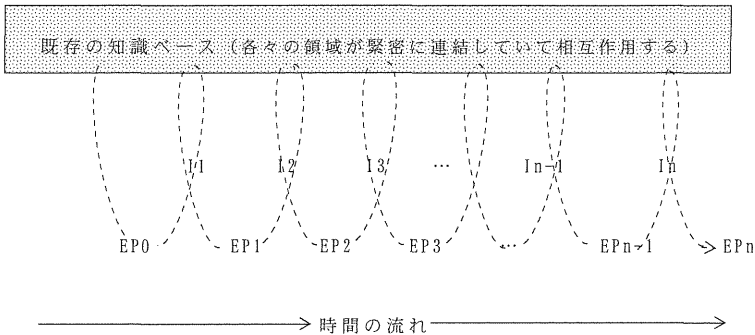
## 第4節 メンタル・スペースと心的パーフェクト

### 4.1 話者の事態認識

話者を囲んでいる情報の流れと状況の変化によって、一つの事態に対する話者の事態認識はどのように変化するのだろうか。例えば、ある事態に接した時、話者はまず自分の既存の知識の集合に基づいてその事態を把握・判断する。既存知識内の学習領域、経験領域、信念領域、判断領域など、分割さ

第4節 メンタル・スペースと心的パーフェクト

れているそれぞれの領域が互いに連結し、必要に応じて事態把握に関与する。最初の事態把握から始まって、事態の状況は時間の流れとともに刻一刻と変化していく。また、情報も加わる。このように、絶えず変わる状況と新しい情報の流入は話者の既存知識内にあるさまざまな領域と相互連結しながら、話者の事態認識の構造を変化させる。図3-2は、事態認識構造が螺旋状に変化していく様子を可視化したものである<sup>2)</sup>。



(注) ---> : 新情報の割り込み EP (Event Perception : 事態認識)  
I (Information : 情報)

図3-2 情報の流入と事態認識構造

ここで、情報 (Information) には直接情報と間接情報があって、前者は話者を囲む状況の把握による内部認識 (Perception) と関わっており、後者は外部から入ってきて認識に影響を与えるものである。

事態認識の例として、ここでは例(8)と(12)を取り上げ、話者の事態認識の変化を考察してみよう。(8)の場合、救助されるか否かに対する次のような認識のプロセスが考えられる。

- (8) 雪山を登山中、がけ崩れに遭う (EP0)
- 遭難したと認識する (既存知識)



### 第3章 未実現事態に用いられる完了形式

- 吹雪が強くて動けない (I1)
- 救助に対して殆ど絶望的 (EP1)
- ラジオから、吹雪が若干おさまリレスキュー隊が出動したとい  
うニュースを聞く (I2)
- 救助されるかも知れないと希望を持つ (EP2)
- 発見されやすいように煙を出す (I3)
- 救助への希望が強まる (EP3)
- 煙を発見したヘリコプターがそれを目印に飛んでくる (I4)
- 発見されて救助されるだろうと認識する (EP4)
- ロープのはしごがおろされる (I5)
- 救助に対して確信を持つ (EP5)
- ⇒助かったぞ。
- |→天候と地形が悪く、はしごが話者のところまで届かず、途中で  
切れる (I6)
- 救助に対して不安になる (EP6)
- 厳しい悪天候のためヘリコプターが撤退する (I7)
- 救助に対して半分絶望的になる (EP7)
- 2, 3日悪天候が続き、救助隊が出動できず、話者は餓死寸前  
の状態になる (I8)
- 救助に対して殆ど絶望的になる (EP8)
- ⇒もう死んだも同然だな|

次に、例(12)の場合の事態認識プロセスを考えてみよう。

- (12) 12個のボールが与えられ、9枚のボードを投げ抜くゲームがある。  
最大3つの失敗が許される。現役捕手の古田とOB投手の遠藤が競  
争をする (EP0: 遠藤の友人のゲームの勝敗についての認識である)。  
→古田が2枚続けてゲットする (I1)

#### 第4節 メンタル・スペースと心的パーフェクト

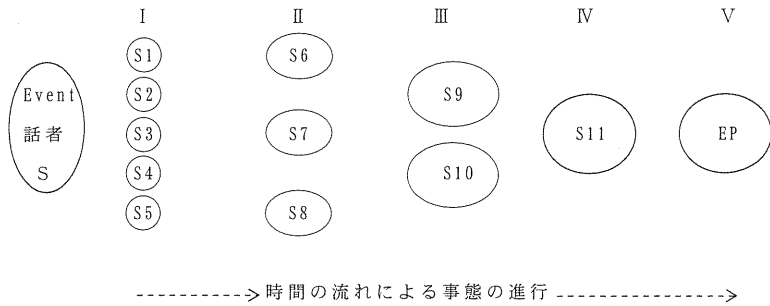
- 遠藤の友人は、古田の勢いに驚きながらも、現役ではないがかつての投手遠藤ならいけるかも知れないと思う (EP1)
- 3球目のボール一個を失敗しながらも4枚目のゲットに成功する。まだ2回の失敗が許される古田である。古田の勢いからまだまだゲットできそう。反面、遠藤は現役から退いてしばらく経つし、古田に投げ勝つほどのゲット枚数が期待できない。遠藤の友人は、遠藤が投手でありながらもゲームに負けると認識する。古田が4枚をゲットした後、2回の失敗を続ける→(遠藤の勝ち負けに対して再考を行う)→古田は最後の投球に失敗して、結局4枚ゲットの成績で終わる。遠藤が連続で2枚ゲットを成功させる→(遠藤にも勝つ可能性がなくはないと思う)→1回失敗しながらも4枚ゲットする→(古田と同等となり、あと1枚ゲットできれば遠藤の勝ちなので、遠藤の勝ちに期待を寄せる)}

話者の事態に対する認識はこのように複雑なプロセスを経ている。レベルCにおけるこのようなプロセスの経過に伴って、話者が持っている事態完了に対するシナリオの数は減少する。すなわち、事態が限界達成点に近づくほど、限界達成結果に対する推論・推測のシナリオの数は絞られ、実現可能性の高いシナリオだけが取り残されることになる。

もっとも、それぞれのシナリオの内容は、話者が立っている現在時から事態完了時までの推論・推測であるため、限界達成に近づくほどシナリオの持つストーリー空間は短くなり、それぞれのシナリオがもつ事態結果に対する確信度は高まる。最終的に、話者は最も実現可能性の高い一つのシナリオ世界を選択し認識する。

一つの事態は、図3-3に見るように、事態完了時までのタームが長いほど多数のシナリオを持ちうる。時間の流れとともに事態も進行し、限界達成に近づくにつれて存在しうるシナリオの数が減少し、各シナリオの事態完了に対する確信度は大きくなっていく。そして、限界達成直前(時点Ⅳ)で

第3章 未実現事態に用いられる完了形式



(注) S ; 発話時  
S1~S11; シナリオ空間  
S11; 限界達成直前のシナリオ  
EP; 限界達成の現実としてのEvent

図3-3 話者の事態認識とシナリオ空間

は、限界達成の現実そのものを描くシナリオが推測・推論できる。例(10)を用いてこの点を説明してみよう。

- (10) (阪神は苦手になっているヤクルトと対戦している。阪神はここ数年ヤクルトに勝ち越しを許しており、逆転勝ちの試合は殆どない。9回裏、9対1でヤクルトにリードされているのを見て…)
- a あ、これで今日も負けたな。
  - b 아, 오늘도 졌다나.

これは、相性の悪いヤクルトと対戦する阪神を応援している阪神ファンのゲームの勝敗に対する認識である。このゲームの勝ち負けの事態と関連して、

パートI時点では、

- 阪神が勝つ (S1),
- 雨で5回前にゲームが中断される (S2),
- ゲームが引き分けになる (S3),

#### 第4節 メンタル・スペースと心的パーフェクト

延長まで伸びる (S4),  
阪神が負ける (S5),  
などのさまざまなシナリオが存在する。

##### パートⅡ,

ゲームの進行が進み7回が終わったところである。今日の阪神打線は元気がなく、ピッチャーはさんざん打たれるし、守備陣もエラーを連発する。反面ヤクルトは全体的に成績がよい。すでに7回まで来ているので、雨でゲームが中断される (S2) 可能性はなくなっている。

##### パートⅢ,

9回裏の最後の攻撃が始まるが、スコアは9対1と依然として元気がない阪神である。負ける (S9) か勝つ (S10 (殆ど可能性はないが)) かのいずれかのシナリオが残される。

##### パートⅣ,

9回裏の攻撃もツーアウトとなったが、塁にはランナーが一人も出ていない。すごいゲーム展開にならない限り、負ける (S11) 可能性は大である (阪神はヤクルトに対して3点差以上リードされたゲームを逆転勝ちした履歴が殆どない)。

##### パートⅤ,

実際にこのゲームの事態が限界点に達し、ゲームが終わって阪神の負けが現実となる (EP)。

とりわけパートⅣでは、既存知識といままでの情報からして阪神に勝ち目はなく、負けることはほぼ確実であると判断・認識する。こうしたパートⅣ時点での認識は、パートⅤでの現実の完了を思い描いたものであるといえよう。

このように、限界達成点を持つ事態に対して、話者は話者を囲むさまざまな状況や情報によって事態の完了を推論・推測する。この事態完了に対する

推測は、限界達成点が近づくにつれ、そのシナリオの数が減少し、最終的に話者認識の中で確信度の一番高い一つのシナリオに絞られる。その結果、最終的なシナリオにおいては現実の限界達成そのものを思い描くことができるのである。

ここで、話者が認識するすべてのシナリオ空間はレベルCにおける心的把握空間と見なすことができる。シナリオ S11において、話者は事態完了について確信を持ち、事態完了そのものを思い描いた未来スペースと事態の限界達成後の未来スペースをもつことができる。シナリオ S11において、話者の視点を事態の限界達成後のスペースに移した結果、事態完了を認識した発話を導く。こうした心的把握による話者の完了認識を「心的パーフェクト」と呼ぶ。そのため、話者の発話に「負けたな」という完了形式が現われうるのである。

#### 4.2 はだかの「タ」「ㇿ」形式

このように、未実現事態に対して「タ」「ㇿ」形式の言語表現が用いられる現象の存在は、レベルCにおける心的把握としての完了認識、すなわち「心的パーフェクト」という概念を導入することによって説明可能になる。

つまり、ある未実現事態が存在し、その事態が限界達成に向けて進行する際に、話者はレベルCにおいてその事態が限界達成に至る時点までの時間の流れをスキャンすることができる。そして、その事態の限界達成後のスペースに話者の視点を移すことで「完了」を認識し、発話に「タ」「ㇿ」を表示するのである。

図3-4にみるように、レベルCにおける心的把握によって話者の視点を事態の限界達成後の未来2スペースに移している。第2章においても考察したように、我々は現実の世界で時間の流れの中を行き来することはできないが、レベルCにおける過去、現在、未来のスペースの中ではそれが可能であり、しかもレベルCは現実世界とは独立しているため、視点の移動が可能となる。事態の限界達成後の未来2スペースから未来1スペースを振り返るこ

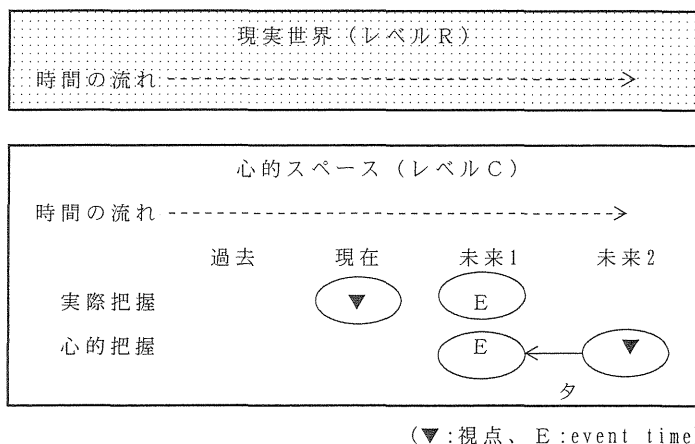


図3-4 心的パーフェクトの発想

とで生じうる完了認識が、発話に具現されたのが「心的パーフェクト」の表示「タ」「畚」であるといえよう。

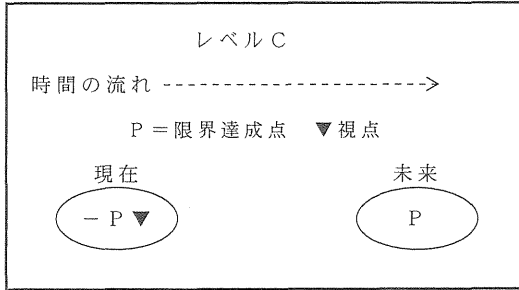
こうした「心的パーフェクト」の概念は図3-4のように要約できる。さらに、この心的パーフェクトという抽象的なベース概念が、レベルCにおいてスペースを構築する様子と、それを言語形式として表出する具体的な経路は図3-5のように表すことができる。

ある未実現の事態を認識する際に、レベルCにおいて最初に構築されるスペースは、事態存在の現在スペースとその事態が限界達成する未来スペースである(図3-5の(1))。その後、レベルCにおいて、現実世界Rからの情報の流れや状況の変化を取り入れながら事態の限界達成後の新たなスペース(未来2スペース)を構築する。その新たな未来2スペースから事態の限界達成時の未来1スペースを振り返ることで、事態完了を認識する「心的パーフェクト」が表示される。

話者の頭の中にはすでに二つの想定空間が存在する。そのひとつは、事態が確かに完成して、限界達成点(P)を持っている未来スペースである。もう一つは、事態未完成(-P)である現在スペースである。ここで、話者に何ら

### 第3章 未実現事態に用いられる完了形式

#### (1) 事態存在の現在スペースと事態限界達成の未来スペース



#### (2) 情報確認による確信後

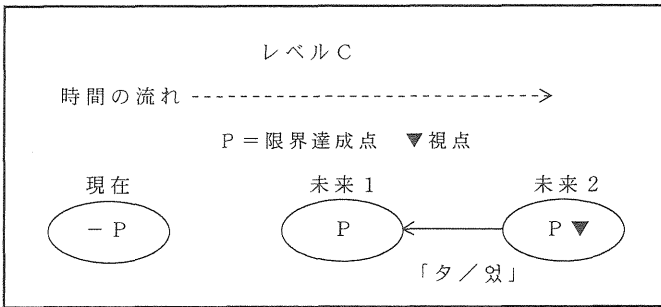


図3-5 「タ」「ㇿ」形式における心的空間と心的パーフェクト

かの情報と状況が与えられれば、事態が限界達成に至る時間の流れをスキャンし限界達成後の新たな空間を作り、その新たな空間から限界達成点(P)をもつ未来スペースを振り返ることで完了認識を働かせることができる。ここでいう新たな空間とは、未実現事態に対する話者の推論・推測に基づいて作られた仮想空間のことである<sup>3)</sup>。話者はこの未来2の限界達成後の仮想空間に視点を置くことにより、未来事態を述べる発話に「完了形」を導くことができるのである。

ある事態に対して、主観的認識判断を述べるときにはモダリティ・マーカが必要である。しかし、この場合には事態完了に対する主観的な認識判

断を、「はだかのタ／ㄹ」の言語表現を用いることで形式的には客観的に述べていることになる。「はだかのタ／ㄹ」に内在する心的パーフェクトというのは、客観性を装う主観的完了認識であると言えよう。すなわち、メンタル・スペース内での完了認識がスペース導入形式を用いずに発話に導かれているといえる。

もっとも、完了認識による「心的パーフェクト」を発話に導くという現象は動詞の意味性質とも関わっている。たとえば、物理的証拠を要求せずその意味範囲が広く具体性の低い動詞や和語動詞など（例えば、「やった、決まった、やられた、うかった」等）のほうが、物理的証拠を要求するなど意味範囲が狭く具体性の高い動詞や漢語動詞など（例えば、「殺された、落ちぶれた、倒れた」等）より、主観的完了認識である心的パーフェクトを表現するに際して、はだかの「タ」「ㄹ」形式を導きやすいといえよう。（詳細は、第5節、第7節を参照のこと。さらに、曹 [1995] によれば、話者決定に関しても同様のことがいえる。第2節参照。）

#### 4.3 明示的形式「～も同然だ」と「～거나 마찬가지다」

未実現事態に対する心的空間内の認識的な完了である「心的パーフェクト」と関連して、日本語の場合、「～も同然だ」の形式を用いることにより、未実現事態に対する「タ」形式の許容範囲がかなり広げられる。つまり、日本語では「～タ」形だけでは許容されなくても、次の例のように、「～タも同然だ」の形式を用いることによって、未来空間での完了を発話空間での認識的完了として表示することができる。韓国語にも、日本語の「～タも同然だ」に相当する「-는(은)거나 마찬가지다」という明示的形式があって、日本語と同じ振る舞いを見せる。

- (16) (例(4)と同じ状況、やくざ映画の一場で、ボスを裏切った人の頭にボスの銃が突きつけられている)

a \*これで、もう死んだか (殺されたか)



- b これで、もう死んだも同然か (殺されたも同然か)
- (17) (例(5)と同じく、ひびの入った花瓶を見て)
- a \*割れたな
- b 割れたも同然だな
- (18) (例(6)と同じく、倒産しかかっている状況を見て)
- a \*これじゃ、落ちぶれたな
- b これじゃ、落ちぶれたも同然だな
- (19) (例(7)と同じく、花瓶を割った友達に向かって)
- a \*お前は叱られたぞ
- b お前は叱られたも同然だな

前述した例(4)～(7)においては、はだかの「タ」形だけで「心的パーフェクト」を表現することに無理があった。しかし、それらに明示的形式「～も同然だ」を付加することによって許容度の高い自然な文にすることができる。

これは、形式的表示「～も同然だ」が新たな想定空間を構築し、その新たな未来想定空間と現在空間とを同一化させているためである。「～も同然だ」によって作られた新たな想定空間から事態の限界達成点を持つ未来空間を振り返ることで、未実現事態に対する話者の完了認識が働き、「心的パーフェクト」の言語表示が導かれる。こうした明示的形式「～も同然だ」による「心的パーフェクト」は、図3-6のように図示できる。

この場合も、レベルCにおいてはすでに二つの想定空間が存在する。事態が明らかに完成し、限界達成点(P)を持っている未来1スペースと、事態未完成(-P)である現在スペースである。ただし、ここでは、はだかの「タ」「있」形の場合とは違って、スペース導入表現「～も同然だ／～거니마관가지다」を明示的形式として用いる。すなわち、「～も同然だ」形式がレベルCにおいて新たな空間を構築する際の触媒として機能するとともに、それが新たな未来想定空間と現在空間とを同一化させている。この明示的形式「～も同然だ」によって作られた新たな想定空間から事態の限界達成点を

第5節 未実現事態に用いられる「タ」「ㇿ」の許容範囲の考察

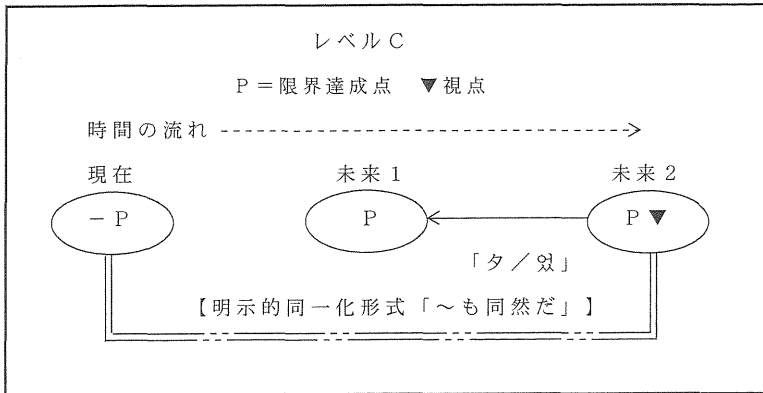


図3-6 明示的形式による想定空間の同一化

持つ未来1スペースを振り返ることで、未実現事態に対する話者の完了認識が働き、「心的パーフェクト」の言語表示が導かれる。

もっとも、完了認識による「心的パーフェクト」の現象は動詞の意味性質とも関わっており、たとえば、物理的証拠を要求し意味範囲が狭く具体性の高い動詞や漢語動詞などについては、「心的パーフェクト」を表示するために「～も同然だ」の明示的形式による想定空間の同一化の手助けが必要とされる。

第5節 未実現事態に用いられる「タ」「ㇿ」の許容範囲の考察

未実現事態に対する発話に表れた言語形式「タ」「ㇿ」に関する理論的ベースである「心的パーフェクト」のモデルを念頭に置きながら、これら「タ」「ㇿ」形式の許容範囲についてみてみよう。

理論的モデルの説明のところでも言及されているが、「タ」「ㇿ」の言語形式が発話に具現されるための前提条件としては、1) ある一つの事態が限界達成に至るといふ過程の明白性を持つこと、2) 状況の流れや情報などが文脈として提示されるか或いは話者の知識として保有されていて、限界達成点

に対する判断・推測の根拠が十分に存在すること、3) 事態の完了を確信して述べられるほどの事態への直接関連性（ひとごとの場合よりわがごとの場合）を持つこと、などが挙げられる。すなわち、動詞の持つ限界性の意味性質と、事態の限界達成を思い描けるだけの情報量と、完了認識を述べるに足りるほどの関連性を持つことが必要となるのである。

### 5.1 事態の進行過程が明白に見えるもの

主として、一定時間内に限界結果に達するゲームや試合、合格・不合格の当落などで、その事態進行過程が明白に見え、しかもその限界達成に近づいていて結論が推測しやすいものが心的空間での完了認識を発話に導きやすい。

- (20) (阪神は苦手にしているヤクルトと対戦している。阪神はここ数年ヤクルトに勝ち越しを許しており、逆転勝ちの試合は殆どない。9回裏、9対1でヤクルトにリードされているのを見て…)

a あ、今日も負けたな。

b 아, 오늘도 졌다나.

- (21) (3枚を投げ抜いたヤクルトの飯田が、競争相手の村田が最初から2枚を続けて抜くのを見た時点で…〈しかし、最後は結局、村田は2枚で終わり、3枚を抜いた飯田が勝つ〉) [96.11.2.毎日放送, 筋肉番付 STRUCK OUT]

a ああ、これ、負けたな。

b 아아, 이거 졌다만.

- (22) (ヤクルトの古田が7枚目をぬいたとき、まだ投げていない競争相手大洋のOBピッチャー斉藤が) [96.11.2.毎日放送, 筋肉番付 STRUCK OUT]

a もう、決まったな。勝ち目ないです。

b 벌써 결판났구만. 이기기는 틀렸어.

第5節 未実現事態に用いられる「タ」「ㄹ」の許容範囲の考察

- (23) (キックターゲットで9枚のうち3枚をゲットした後, 2回失敗が続くところで, ジュピロのドゥンガが) [97.4.6. 毎日放送, 筋肉番付番外編]
- a もう, 終わったな。やめた。
  - b 이제, 끝났네. 포기했어.

これらは, 勝つか負けるかの両限界達成の局面に関する推論・推測から導かれた発話である。事態を直接観察しているため, その進行過程が明白であり, なおかつその事態の結果に対する推論・推測もしやすい。この心的把握によって, レベルCに限界達成後の未来2のスペースを構築し, 限界達成点をもつ未来1のスペースを振り返ることで, 事態完了認識による「心的パーフェクト」の「タ」「ㄹ」が表示される。

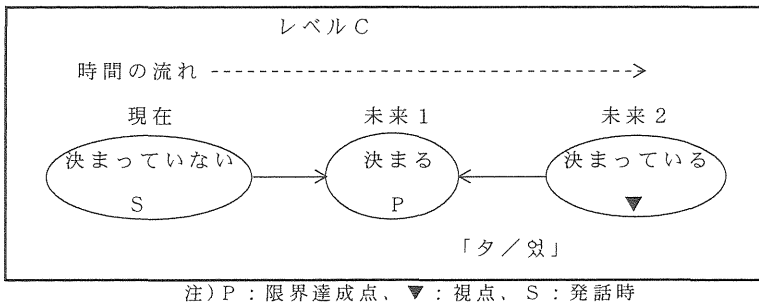


図3-7 もう, 決まったな

5.2 話者の意思決定を表すもの

事態の完了結果を話者自らの意志でコントロール可能なものほど, 心的空間の導入および心的パーフェクトの発話が容易になる。

- (24) (キックターゲットで9枚のうち3枚をゲットした後, 2回失敗が続くところで, ジュピロのドゥンガが) [97.4.6 毎日放送, 筋肉

番付番外編]

a もう、終わったな。やめた。

b 이제, 끝났네. 포기했어.

(25) (まだお金を払っていないが, 気に入った製品を買おうと決めて)

a よし, これ, 買った。

b 자, 이걸로, 샀어.

(26)

a よし, 決めた。

b 자, 정했다.

これらは、話者の意思決定を反映したものである。「試合をやめる」「ものを買う」という事態の完了が、話者の自己コントロールの範囲内にあるので、意思決定段階でそうした発話ができるのである。いいかえれば、「買う」「やめる」「決める」の場合、現実の行為以前に話者の決意が表明される。

このように、話者の意思決定と関わるものは事態の完了を話者が自己コントロールできるので、空間同一化が起りやすいのであろう。例24の場合、いま現在は「やめていない」が、話者の心的空間では半ばあきらめてやめた気持ちになっており、25の場合、「買ってはいない」が「買う」という話者自身の行為を決めたものであり、26の場合は、「現実の行為は起こしていない」が「行為を起こす」という決意が固まったことを表明するもので、その心的空間での完了認識を表すために「タ」形が使われているといえる。

### 5.3 ネガティブな限界達成

5.1 で、事態進行と限界達成が明白に見えるほど、心的空間での完了認識を発話に導きやすいと述べたが、その場合でも、(20)~(23)に見るように、ポジティブな限界達成をもつ事態よりネガティブな限界達成をもつ事態のほうが許容度が高い。

## 第5節 未実現事態に用いられる「タ」「ㇿ」の許容範囲の考察

これは、一つの事態が完了に到達するにあたって、ポジティブな完了に至る事態のほうがネガティブな完了に至る事態より高いエネルギーを必要とするからであろう。一つでも自己コントロールできない要因が存在すれば、ポジティブな完了に達することは難しい。反面、ネガティブな完了に至るには、一つでもネガティブな要素が加わればその方向に向かうという意味で、あまりエネルギーを消耗しない。さらに、ネガティブな場面のものをポジティブな場面に変えるためにはかなりのエネルギーが必要であるため、一般的にはネガティブな限界達成のほうが容易と判断されるからである。そこで、情報量が同じ場合は、事態のポジティブな限界達成よりネガティブな限界達成をもたらすものの方が許容度が高い。

### 5.4 手持ち根拠の量と質

「～も同然だ」を伴う場合は、「心的パーフェクト」を具現する「タ」「ㇿ」の言語表現の許容範囲が広げられたが、明示的形式の手助けなしに心的完了を認めるためには、事態完了までに時間的に接近していて、しかも発話時までの事態進行状況と限界達成に関するより多くの情報が必要となる。状況説明と情報が多ければ多いほど、心的完了を認め、未実現事態に言語形式「タ」「ㇿ」を用いることが容易となる。次の例をみてみよう。

(27) Aさんは何回も同じコンテストに参加している。参加を重ねるたびに不足部分をみがき直し、今回はすばらしいほど完璧である。それゆえに審査委員の審査評で一番良い誉め言葉を聞いた。そのコンテストの結果発表の直前、Aさんの独り言。

- a. これで、選ばれたも同然だな。
- b. よし、今回はきっと選ばれたぞ。

(28) 大根畑から100本の大根を先に掘りだしたものの勝ちの、かけをした。Aさんは最後の100本目の大根を手握りながら隣のBさんを見ると、Bさんはまだ90本目を掘っている。

- a. これで私が勝ったも同然だな。
- b. これで私が勝ったぞ。

上記の二つの例は、いずれも事態完了まで時間的に接近しているし、完了結果を予測・判断できるだけの手持ち根拠をもっているといえる。まず(27)は、コンテスト参加の経過と自己進歩、さらに「審査委員からの一番良い評価」がAさんにとっての判断の手持ち根拠になって、事態完成結果の予測がついた場合である。(28)は、まだ10本も大根を残しているBさんと、最後の一本を掘っているAさん自身の比較がAさんにとって判断の手持ち根拠になって、事態完成が確信できた場合である。

### 5.5 動詞のもつ意味性質

未実現事態に対して「タ」「ㄹ」形が許容される度合いに影響を及ぼす要因の一つとして、動詞の持つ意味性質をあげることができる。語彙的に物理的な結果を伴う述語よりそうでない述語の方が許容度が高い。また、動詞の意味範囲と関連して、「××シタ」の「××」の内容を狭く規定する具体性の高い動詞や漢語動詞より、「××シタ」の「××」の内容が明示されず、意味範囲も曖昧で広く、具体性の低い動詞や和語動詞のほうが許容度が高い。

- (29) (例(4)とその変形) (ヤクザ映画で、ボスを裏切った人の頭にボスの銃が突き付けられている)
- a \*これで(もう)、殺されたな。
  - b ああ、やられたな。
  - a' 이제, 죽었구나.
  - b' 아아, 당했구나.

ここでは、「殺される」ことが確かであり、事態完了も推測しやすいにも

第5節 未実現事態に用いられる「タ」「ㄷ」の許容範囲の考察

かかわらず、aの「殺された」の場合は「タ」形が許容されない。反面、bの「やられた」の場合は許容されている。これは、前者の「殺された」が「殺され、死体になる」という物理的な完了証拠を要求する具体性の強い述語であるのに対し、後者の「やられた」は、事態の内容を細かく規定せず広い範囲をカバーする抽象的な述語であるからである。すなわち、両述語の意味属性には相違があり、それが許容度に影響しているのであろう。

(30) (発表は数日後であるが、試験後の自己採点でかなり出来が良かった場合)

- a \*入学したぞ。
- b これで、うかったぞ。
- a' ?? 입학했어。
- b' 질렀다./똥어。

(31) (試合で打たれ続けてふらふらのボクサーを見て)

- a \*あれじゃ、倒れたな。
- b これじゃ、敗れたな。
- c やられたな。
- a' ?? 넘어졌네。
- b' 깨졌다。
- c' 당했구나。

(30)と(31)の場合も、同様に、「入学する」は「入学式を行い、学校のメンバーの一員になる」、「倒れる」は「体が床につく」など、完了の証拠となる「××シタ」の内容が具体的に求められる反面、和語動詞である「うかった」や「敗れた、やられた」などは、「××シタ」の内容が抽象的で具体性の低い水準にとどまっている。



第6節 未実現事態に用いられる「ル」と「タ」の対立  
——「これは勝つ」と「これは勝った」について——

前節において、未実現事態に用いられる「タ」と「ヌ」の許容範囲について考察を行ったが、それとは別に、未実現事態に用いられる「ル」と「タ」の対立についてはいかに説明できるのだろうか。本節では、ある事態がその限界達成に向けて進行している際に、事態の完了を確信する場合の「ル」と「タ」の対立について考察してみよう。

未実現事態に関する従来の記述においては、事態の完了が確認できれば、以下の a のル形と b のタ形がともに成立するとされている。

- (32) a これは勝つ。  
b これは勝った。

しかし、第2章において考察したように、言語表現(E)は心的スペース(C)への指令であり、現実世界(R)とは独立している。すなわち、タ形はRとは独立であり、現実世界Rの時間の流れとレベルCの時間の流れは独立しているため、現実世界の時間の経過が直接「タ」の使用を決定づける訳ではない。つまり、bの「タ」はレベルCでの心的表示なのである。このことを検証するために、以下のような仮説を立ててみよう。

仮説 I：ある事態に対する同様な状況の下で、二つの発話が成立し、その意味に何ら相違が存在しないとすれば、同一意味を持つ副詞を伴っても、両者の間に意味の相違は起こらない。

しかし、以下の例に見るように、「ル」形と「タ」形の発話の間には許容度に相違が生じる。

第6節 未実現事態に用いられる「ル」と「タ」の対立  
 ——「これは勝つ」と「これは勝った」について——

- (33) a このままだと負ける。  
 b \*このままだと負けた。
- (34) a このままだとやられるぞ。  
 b \*このままだとやられたぞ。

これは、「このまま」という修飾語と関連する。この修飾語は、「ある事態において現状を維持する」という意味を含んでおり、現在のスペースに視点を固定したまま推移を予測することを示す副詞句である。そのため、レベルCにおいて、推移による事態限界達成後のスペースの設定が不可能であるとともに、その推移後のスペースに視点を移動することもできない。すなわち、aにおける話者視点は、「このまま」が指定するスペースに置かれることになる。これを図示すると以下のようなになる。

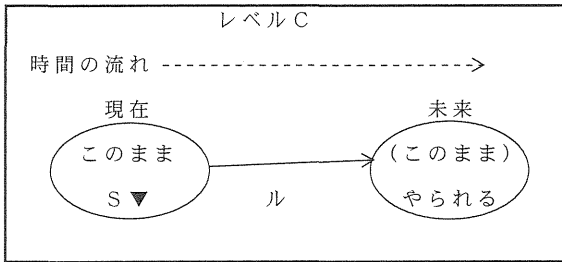


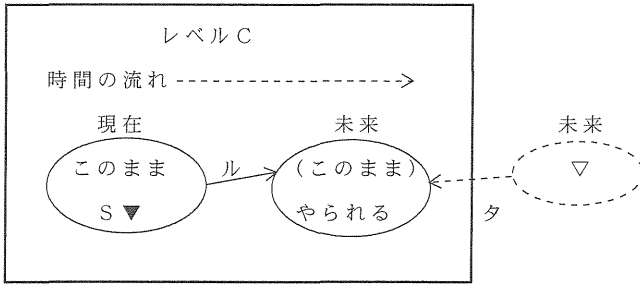
図3-8 「このまま」のスペースと「ル」

また、

- (35) a これなら勝つ。  
 b ?これなら勝った。
- (36) a これなら助かるぞ。  
 b ?これなら助かったぞ。

においても、「これなら」という修飾語は、「「これ」という現在スペース内に存在するある解釈を受け入れるとすると」のようなスペースを指定してお

第3章 未実現事態に用いられる完了形式



注) ▼: 「ル」が用いられる場合の視点の位置、

▽: 「タ」が用いられる場合の視点の位置。

図3-9 「このまま」のスペースと「タ」

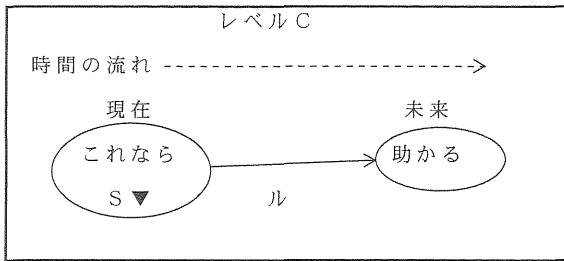
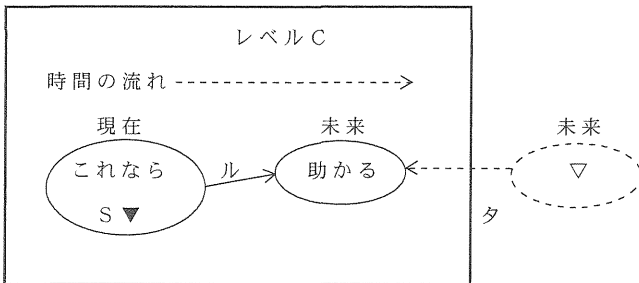


図3-10 「これなら」のスペースと「ル」



注) ▼: 「ル」が用いられる場合の視点の位置、

▽: 「タ」が用いられる場合の視点の位置。

図3-11 「これなら」のスペースと「タ」

り、「このままだと」と同じく、事態の限界達成後のスペースへの視点の移動を妨害する。「タ」形が成り立たないのはそのためである。

以上のような結果は、仮説Ⅰを支持するものではない。「このまま」や「これなら」のように、解釈範囲を指定する修飾語を伴う文において「タ」形が成り立たないのは、逆に言えば、「タ」形は、レベルCにおいて事態が限界達成に至るまでを推移し、限界達成後のスペースから事態を振り向くことによって生じる「完了認識」の表示であることを裏付けるものであるといえよう。

このような観点から、改めて例(32)を見てみよう。

(37) (例(32)と同じ)

- a これは勝つ。
- b これは勝った。

bの「タ」はレベルCでの心的表示なのである。この場合、発話時の現実世界Rにおける試合の情報をもとに、レベルCの心的スペースが構築される。その際、現実世界Rの状況のうちの関連要素が「これは」を通して、レベルCに設定されるとともに、試合の流れに対する話者の確信までもレベルCに書き込まれる。そして、限界達成後のスペースに視点を置きつつ、事態を振り向くことによる「完了認識」が「タ」によって表示される。こうした分析は、図3-12や図3-13のように図示することができる。

「これは」という修飾語は、話者の判断資料としての状況の提示であり、スペース限定表現ではない。提示された状況から事態の限界達成までを推移することを妨害するものは何もない。そこで、事態限界達成までの推移を行い、その限界達成後に話者視点を置くことで「タ」が表示されると言えよう。

要するに、このル形とタ形の相違については、図3-12と図3-13の比較からわかるように、発話時の現実世界で得られた情報とその情報を元にする確言や確信をレベルCの新たなスペースに書き込む場合、話者の視点がど

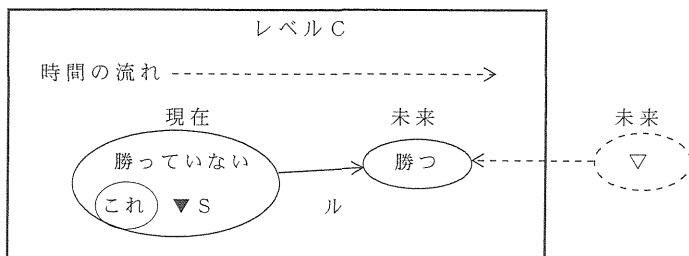


図3-12 これは、勝つ

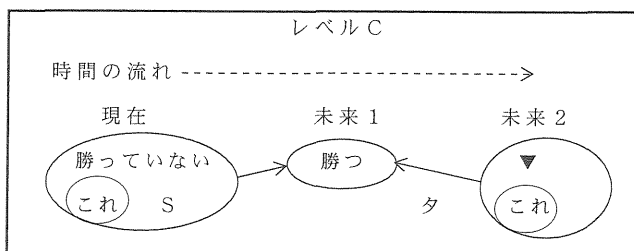


図3-13 これは、勝った

ここにあるか、つまり、レベルCに事態の限界達成後のスペースまでを含んでいるか否か、限界達成に対する話者の完了認識が働くか否かによって、aとbの「ル」形と「タ」形のニュアンスの違いがもたらされる。後者の場合、「これ」で指し示される状況は未来2スペースに写像できるのである。

## 第7節 日・韓語における語用論的相違

### 7.1 「心的パーフェクト」に対する許容度の相違

第5節では、未実現事態に用いられる「タ」「ㄹ」の許容範囲に影響する要因として、事態の進行過程、話者の意思決定、ネガティブな限界達成、手持ち根拠の量と質、動詞の意味性質などを考察した。とりわけ「動詞の意味性質」については、仮に「心的パーフェクト」を発話に導くための他の条件

がすべて備わっている場合でも、動詞の意味性質によってそれが許容されないことがありうるという点で、その重要性が認められる。

本節では、こうした「動詞の意味性質」の相違という観点から、日韓両言語における「心的パーフェクト」の発話の許容度の相違を検討したい<sup>4)</sup>。その際、以下の各例文の左半分は「はだかの「タ／있」による心的パーフェクトの発話」を表しており、右半分は「明示的形式「～も同然だ／-거나 마찬가지다」を伴う心的パーフェクトの発話」を表している（\*/??/? は容認度を示す）。

- (38) (例(4)とその変形) (ヤクザ映画で、ボスを裏切った人の頭にボスの銃が突き付けられている)
- |    |                  |                   |
|----|------------------|-------------------|
| a  | *これで (もう), 殺されたな | ～, 殺されたも同然だ       |
| b  | *これで (もう), 死んだな  | ～, 死んだも同然だ        |
| c  | ああ, やられたな        | ～, やられたも同然だ       |
| a' | ? (이제) 죽음을 당했구나  | ～, 죽음을 당한거나 마찬가지다 |
| b' | (이제) 죽었구나        | ～, 죽은거나 마찬가지다     |
| c' | 아아, 당했구나         | ～, 당한거나 마찬가지다     |

上記例(38)は、話者が確実に「殺される」状況におかれていることを自ら判断した場合の発話である。ただし、その状況を述べるすべての述語に「タ」「있」形の発話が許される訳ではない。語彙的に物理的属性を持つ述語、すなわち「殺された結果、死体になる」といった完了証拠を伴う述語（たとえば、殺される、死んだ等）の場合は、「心的パーフェクト」を発話に導くことは容易ではない。反面、「やられた」の場合は、事態の内容が細かく規定されないため、「××シタ」の××の意味が曖昧で具体性を欠いており、「タ」形の発話が許容されやすいのである。ここで、明示的形式「～も同然だ」を伴うと、物理的属性を有する述語の場合であってもその物理的属性の

制約がゆるくなり、許容度が高くなるといえる。

一方の韓国語の場合は、日本語に比べると全般的に具体性に対する制約がゆるいようである。

(39) (例(5)とその変形) (割れそうな大きなひびが入っている花瓶を見て)

- |    |           |                   |
|----|-----------|-------------------|
| a  | *粉ごなになったぞ | *粉々になったも同然だ       |
| b  | *割れたぞ     | 割れたも同然だ           |
| a' | *산산조각났네   | ?? 산산조각난거나 마찬가지로다 |
| b' | 깨졌네       | 깨진거나 마찬가지로다       |

ここでは、たくさんの破片を持つ「粉々になる(산산조각나다)」は物理的証拠を要求する述語であるため、日韓語いずれにおいても許容されない。bの場合も、日本語の動詞「割れた」は「一つのが二つ以上に分かれる」という意味での物理性が関連するため、許容度が低いように思われる。

反面、韓国語の動詞「깨졌다(깨졌네)」は、ひびが入ることも、割れて破片を持つことも含意する意味幅の広い述語である。したがって、意味幅の相対的に狭い日本語「割れた」とのあいだで許容度に相違が生じている。実際、韓国語においても、述語が「산산조각났다(粉々になった)」の場合は許容度がかなり落ちる。

(40) (例(6)とその変形) (経営している会社が、倒産しかかっている状況を見て)

- |   |                |                |
|---|----------------|----------------|
| a | *ああ、もう、落ちぶれたな  | ～、落ちぶれたも同然だな   |
| b | *ああ、無一文になったな   | ～、無一文になったも同然だな |
| c | *ああ、もう、倒れたな    | ～、倒れたも同然だな     |
| d | *ああ、もう、人手に渡ったな | ～、人手に渡ったも同然だな  |
| e | これで、終わったな      | ～、終わったも同然だな    |

第7節 日・韓語における語用論的相違

- f もう, 倒産, 決まったな      ~, 倒産, 決まったも同然だな  
 g やられたな      やられたも同然だな  
 a' 아아, 이제, 망했구나      ~, 망한거나 마찬가지로  
 b' 아아, 빈 털털이가 되었구나  
      ~, 빈 털털이가 된거나 마찬가지로  
 c' 아아, 이제 넘어졌군      ~, 넘어진거나 마찬가지다  
 d' 이제, 남의 손에 넘어갔구나      ~, 넘어간거나 마찬가지다  
 e' 이제 끝장났구나      ~, 끝장난거나 마찬가지다  
 f' 이제, 도산, 정해졌구나      ~, 도산, 정해진거나 마찬가지다

この場合、日本語の「落ちぶれる, 無一文になる, 倒れる, 人手に渡る」などは、具体性の制約のため不適切な文となるが、韓国語の場合は、具体性の制約がゆるく、許容されている。

また、「終わった」「決まった」などについては、前者が「話者のあきらめ」を、後者が「倒産への方向性の決定」を反映するため、話者の心的パーフェクトが許容されやすいといえよう。

(41) (例(7)とその変形) (花瓶を割った友達に向かって)

- a \*おまえ, もう, 殴られたぞ      \*~, 殴られたも同然だぞ  
 b \*おまえ, もう, 叱られたぞ      ~, 叱られたも同然だぞ  
 c もう, 大変なことになったぞ  
 a' ?? 너 이제 매 맞았어      ?~, 매 맞은거나 마찬가지다  
 b' 너 이제 혼났어      ~, 혼난거나 마찬가지다  
 c' 이제 큰일났구나

この場合は、物理的な衝撃を伴う「殴られる(매맞다)」は、日韓語のいずれにおいても許容度が低い。物理的屬性の弱い「叱られる(혼나다)」については、韓国語のほうは許容度が高いが、日本語の場合は「~も同然だ」



の手助けを借りてのみ許容される。この点からも韓国語のほうが物理性に對する制約がゆるいといえる。「大変なことになった」については、発話時点に既に「大変なことになっている」ため、許容度に何ら問題はない。

(42) (セ・リーグの優勝を決めるプレーオフ戦。阪神は苦手チームのヤクルトと対戦している。9回裏、9対1のスコアを見ているヤクルトのファン…〈阪神はここ数年、ヤクルトに勝ち越しを許しており、逆転勝ち歴は殆どない〉)

- |    |                     |             |              |
|----|---------------------|-------------|--------------|
| a  | ??優勝したぞ             |             | ?優勝したも同然だ    |
| b  | 優勝はもらったぞ (もらっておいたぞ) | ~           | もらったも同然だ     |
| c  | 優勝は預かったぞ (預かっておいた)  | ~           | 預かったも同然だ     |
| d  | 勝ったぞ                | ~           | 勝ったも同然だ      |
| e  | やったぞ                | ~           | やったも同然だ      |
| f  | 決まったぞ               | ~           | 決まったも同然だ     |
| g  | 勝負, ついたな            | ~           | ついたも同然だ      |
| a' | ?우승했다               |             | 우승한거나 마찬가지로다 |
| b' | 우승은 말아 놓았어          | 우승은 말아 놓은거나 | 마찬가지다        |
| c' | 우승은 말아 놓았어          | 우승은 말아 놓은거나 | 마찬가지다        |
| d' | 이겼다                 | 이긴거나        | 마찬가지다        |
| e' | 해냈다                 | 해낸거나        | 마찬가지다        |
| f' | 결정됐어                | 결정된거나       | 마찬가지다        |
| g' | 결판났다                | 결판난거나       | 마찬가지다        |

この場合は、「ゲームに勝つことイコール優勝」にもかかわらず、漢語動詞である「優勝したぞ」は許容度が低く、和語動詞である「勝ったぞ」の許容度は高い。韓国語においても、漢語動詞 a' 「우승했다」は若干許容度が落ちるが、明示的形式を伴うと適切な文になる。この例においても、全体的に韓国語のほうがその制約はゆるいといえよう。

(43) (試合で打たれ続けてふらふらのボクサーを見て)

a	*あれじゃ、倒れたな	? ~倒れたも同然だ
b	これじゃ、負けたな	~負けたも同然だ
c	これじゃ、敗れたな	~敗れたも同然だ
d	やられたな	~やられたも同然だ
e	もう、決まったな	~決まったも同然だ
f	勝負、とられたな	~とられたも同然だ
g	勝負、ついたな	~ついたも同然だ
a'	??저러면 넘어졌네	저러면 넘어진거나 마찬가지로
b'	저러면 졌다	저러면 진거나 마찬가지로
c'	저러면 깨졌다	저러면 깨진거나 마찬가지로
d'	당했구나	당한거나 마찬가지로
e'	정해졌네	정해진거나 마찬가지로
f'	승부 빼앗겼어	승부 빼앗긴거나 마찬가지로
g'	결판났네	결판난거나 마찬가지로

この場合は、aの「倒れた」という述語が物理的に体が床につくという証拠を要求する述語であるため、その許容度が低い。その点、bとcは物理的属性的の弱い述語であり、その許容度も高い。韓国語についても、同様のことがいえる。

(44) (発表は数日後であるが、試験後の自己採点でかなり出来が良かった場合)

a	??入学できたぞ	入学できたも同然だ
b	これで、合格したぞ	~合格したも同然だ
c	これで、うかったぞ	~うかったも同然だ
d	これで、決まったぞ	~決まったも同然だ
e	やったぞ	~やったも同然だ

第3章 未実現事態に用いられる完了形式

a' ??입학했어	입학한거나	마찬가지다
b' 이걸로 합격했어	이걸로 합격한거나	마찬가지다
c' 이걸로 걸렸어/됐어	~걸린/된 거나	마찬가지다
d' 정해졌어	정해 진거나	마찬가지다
e' 해냈어	해낸거나	마찬가지다

ここでも、漢語動詞の「入学できた」は許容されにくい。ところが、「～も同然だ」の明示的形式を伴うと許容されやすくなる。韓国語の場合にも同様のことが当てはまる。

(45) (時限爆弾を仕掛けたテロリストが、爆発まで間もないビルを見て)

a *これで, 爆発したぞ	~爆発したも同然だ	
b これで, やっつけたぞ	~やっつけたも同然だ	
c これで, やったぞ	~やったも同然だ	
a' ? 이제 폭발했어	이제 폭발한거나	마찬가지다
b' 이제 해치웠어	이제 해치운거나	마찬가지다
c' 이제 해냈어	이제 해낸거나	마찬가지다

ここでは、「爆発する」が、爆発が起こって建物が崩壊するという物理的証拠を要求する述語であるため、許容度は低くなる。ただし、明示的形式を伴うことによって物理的証拠に関する制約がゆるくなり、適切な文になる。「やった」の場合は、「××シタ」の「××」の内容が抽象的で曖昧であるため、許容されやすい。

動詞の意味性質と関連するこれまでの考察は、以下のようにまとめられる。

1) 両言語において共通する点は、述語の意味制約である。つまり、述語

の意味領域が狭く、物理的証拠を要する具体性の高い述語の場合は、「心的パーフェクト」の「タ」「ㄷ」の許容度が落ちる。要するに、具体性を持つ動詞より抽象性の高い動詞のほうが、また漢語動詞より和語動詞や韓語動詞のほうが許容されやすいといえる。

すなわち、物理性をもつ具体性述語は、レベルCに限界達成後の新たな未来2スペースの構築を阻止するとともに、未来2スペースから未来1スペースを振り返るための物理的証拠を要求する。ここで、その物理的証拠が認められないと現在スペースから未来1スペースへの変化を把握する程度が弱まることになる。このように、物理的証拠の制約が変化把握の程度を弱めている。特に日本語の場合は、変化把握の程度が低くなると、レベルCに限界達成後の未来2スペースを設定することができない（次節の日本語に関する記述を参照のこと）。そのため未来2スペースに視点を移すことができず「心的パーフェクト」が許容されない。これを図示すると以下ようになる。

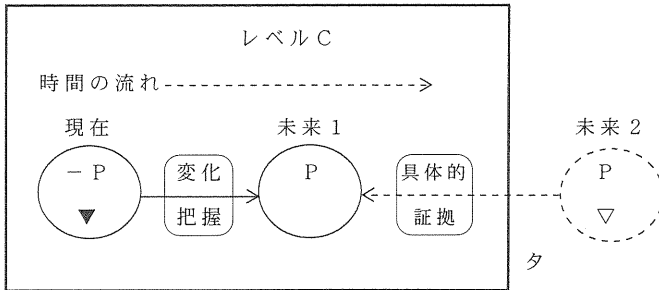


図3-14 物理性を要求する具体性の高い動詞の場合

2) 日・韓語において同じ意味を表す述語であっても、その述語に内在している意味性質（具体性の意味領域の幅）には両言語の間に微妙な差があり、その意味領域の差ゆえに許容度にも相違が見られることがある。

3) 同一化された新たなスペースを導入できる明示的形式「～も同然だ／～거나 마찬가지로」によって、物理的証拠に対する制約が解除され、「心的

パーフェクト」を発話に導くことがより容易になる。

これは、明示的形式「～も同然だ」がレベルCに限界達成後の未来2スペースを構築することを意味し、レベルCに未来2スペースさえ設定できれば、その未来2スペースに話者視点を移動し、そこから限界達成の未来1スペースを振り返ることにより「心的パーフェクト」を表示できることを意味する（次節の韓国語に関する説明を参照のこと）。これを図示すると以下のようになる。

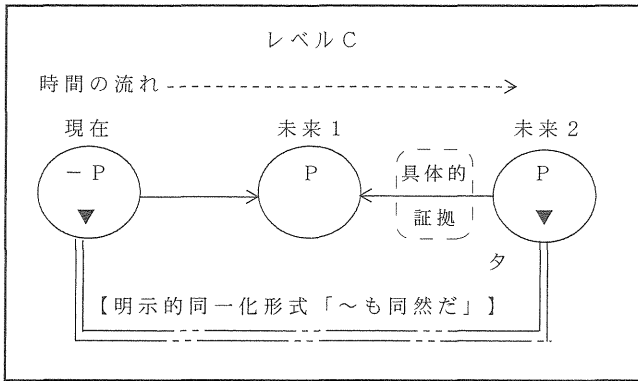


図3-15 明示的形式「～も同然だ」により具体性制約を克服する場合

4) 「やった」「やられた」などのように、「××シタ」の××の内容が明確に提示されない抽象性の高い述語ほど、「心的パーフェクト」の発話になじみやすい。

## 7.2 テンス・アスペクトにおける語用論的相違との関連

「タ」「タ」形における両言語の語用論的相違は、テンス・アスペクトの違いとどのように相関するのか。これについては、両言語のテンス・アスペクトの相違を考察している、井上・生越 [1997] および生越 [1995] が参考になる。

- (46) (相手の服のボタンがとれているのを見て、相手に)  
a ? ボタンが落ちた。  
b 단추 떨어졌어.
- (47) (腕時計が止まっているのに気づいて)  
a ? あ, 止まった。  
b 어, 멈추었네.
- (48) (道で知らない人が死んでいるのに気づいて)  
a ? あ, 人が死んだ。  
b 어, 사람이 죽었다.
- (49) (夜, 台風が通り過ぎた。強い風で庭の大切にしている松も枝が折れたのではないかと思った。朝, 庭の松を見て)  
a やっぱり折れたか。  
b 역시 부러졌구나.

井上・生越 [1997] は、これらの例(46)~(49)を示し、「タ」「있」の違いについて、「日本語では、変化を直接知覚しないと「タ」を使いにくいが、朝鮮語の「있」にはそのような制約がない」とし、その違いは語用論的制約の違いによるものであると解釈している。

つまり、(46)~(48)に見るように、変化が起きたときの様子を話者が見たり聞いたりして直接知覚していない限り、日本語の「タ」は許容され難いが、韓国語の「있」は許容されている。ただし、変化の瞬間そのものを直接知覚していなくても、(49)のように変化前の状況及び変化原因を直接知覚している場合は、日本語においても「タ」が使えると解釈している。

以下では、井上・生越 [1997] の示した例文(46)~(49)とその解釈を念頭に入れながら、「タ」と「있」のレベルCの構築を考察してみる。ただし、ここに用いるメンタル・スペースによる図示は、筆者が新たに付け加えたものである。

まず、上記の例(46)~(48)において、日本語の場合、過去2から過去1に至る

第3章 未実現事態に用いられる完了形式

プロセスに語用論的制約があり、レベルCにおいて過去1のスペースは設定されない。そのため、発話時の現在スペースから過去1のスペースを振り返ることは不可能であり、したがって心的表示「タ」は許容されない。

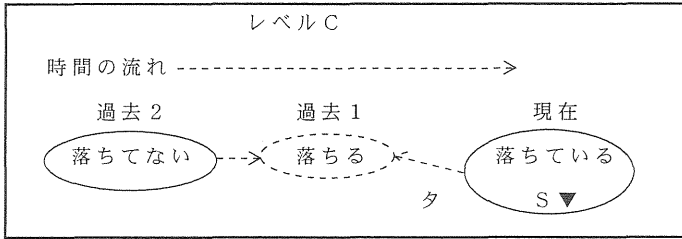


図3-16 ボタンが落ちた

しかし、韓国語の場合、過去2から過去1に至るプロセスにおいて制約はなく、変化前の状況と違うことがわかれば、変化達成後の現在スペースから過去1のスペースにおける変化達成を完了認識することができる。「있」が許容されるのはそのためである。

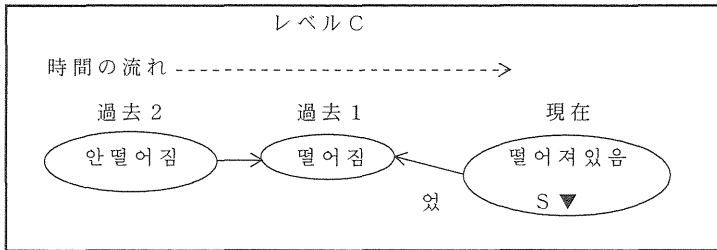


図3-17 단추 떨어졌다 (ボタン 落ちた)

以下の例(50)を見てみよう。

- (50) (例(49)と同じ) (夜, 台風が通り過ぎた。強い風で庭の大切にしている松も枝が折れたのではないかと思った。朝, 庭の松を見て)  
 a やっぱり折れたか。

b 역시 부러졌구나.

このように、レベルCにおいて、「台風で枝が折れる」という過去2スペースから過去1スペースへの変化を把握することで、直接知覚に対する制約が緩和されると、変化達成後の現在スペースから過去1のスペースを經由し、変化プロセスの把握までを振り返ることにより、「タ」が心的表示される。

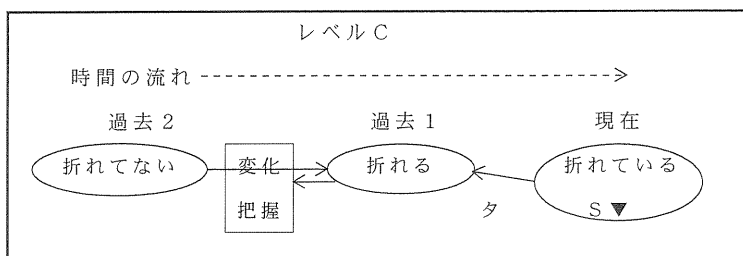


図3-18 レベルCにおける変化プロセスの把握（日本語の場合）

ここで、変化プロセスの把握部分をクローズ・アップしてみると以下のようにになる。

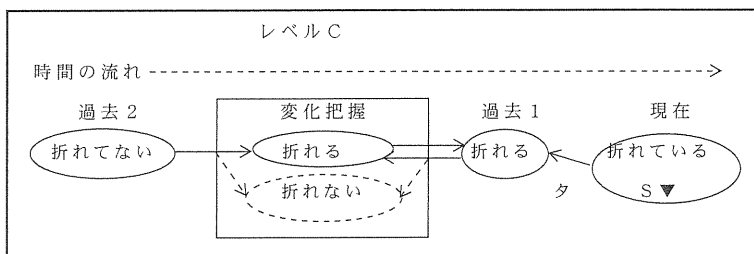


図3-19 変化プロセスのクローズ・アップ（日本語の場合）

韓国語の場合は、例(46)~(48)と同様に、過去2から過去1に至る変化プロセスが直接知覚されなくても、過去2から過去1への変化が生じていれば、変



化達成後の現在スペースから過去1のスペースを振り返ることで、完了が認識でき、「있」が心的表示される。

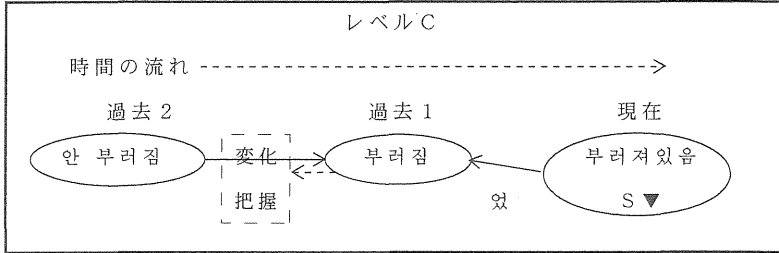


図3-20 レベルCにおける変化プロセスの把握（韓国語の場合）

ここでさらに、変化プロセスの把握部分をクローズ・アップしたのが、図3-21である。

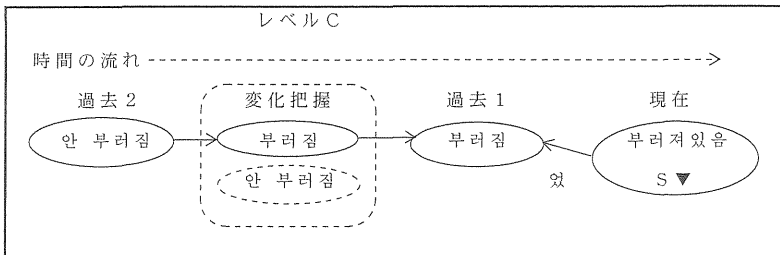


図3-21 変化プロセスのクローズ・アップ（韓国語の場合）

要するに、日本語の場合は、過去2のスペースから過去1のスペースへの変化のプロセスが把握できれば、現在スペースから過去1スペースを経由し、その変化のプロセスの把握までを振り返ることができ、したがって「た」が心的表示される。しかし、韓国語の場合は、変化している過去1のスペースを振り返ることだけで「있」が心的表示される。すなわち、変化のプロセスが具体的に把握できていなくてもよいということになる。

これは、日・韓両言語間の語用論的制約の差がレベルCにおけるスペース

設定の相違をもたらし、さらには心的表示の制約に相違をもたらすことを意味する。

韓国語の場合、レベルCにおいて、変化プロセスの把握をさほど考慮にいけないことが特徴的であるが、このことは心的表示「ㄹ」に対する制約が緩いことを意味するものである。逆に日本語においては、「～テイル」形が発達しているため、「テイル」と「タ」の対立がより鮮明であることも指摘できよう。

井上・生越 [1997] によれば、変化瞬間そのものを直接知覚していなくても、変化前の状況及び変化の原因を直接知覚していれば、つまり、変化のプロセスすべてを知覚していなくても、変化のプロセス全体を把握できる程度のことを直接知覚していれば、日本語の場合も「タ」形を使うことができる。一方、韓国語では、変化の様子や変化前の状況を直接知覚したか否かは問題ではなく、変化前の状況がどうであったかをその場の状況からはっきりわかるのなら、「ㄹ」形が使えるという。

テンス・レベルにおけるこのような語用論的な相違は、未実現事態に用いられる「タ」「ㄹ」の許容度の相違に関する本稿の立場を支持するものである。すなわち、日本語と韓国語の心的表示の「タ」と「ㄹ」において、「ㄹ」が「タ」よりその制約が緩いのはスペース設定の制約として働く語用論的相違によるものであると説明できる。

すでに変化の終わった事態に対しては、その変化を直接知覚あるいは経験しているか否かによって日本語においては語用論的制約が課されるものの、直接知覚がなくても変化プロセスさえ把握できれば、日本語「タ」についても制約が緩くなる。一方、直接知覚のできない未実現事態に対しても同様のことがいえる。すなわち、事態変化のプロセスをレベルCにおいて把握できるか否か、その把握の程度がどれほどであるかによって未実現事態に用いられる「タ」と「ㄹ」の許容度には差が現れる。日本語においては、未実現事態の変化のプロセスを直接知覚できるかのように確信されなければ「タ」が使いにくいのに対し、韓国語においては、状態変化後のスペースさえ設定で

きればプロセスの具体性に関わらず「ㄹ」が用いられるのである。第2節の表3-1に現れた日・韓国語における許容度の差異はこのような語用論上の差異を反映しているものと考えられる。

## 第8節 む す び

本章では、まず、実現されていない未実現事態に「タ」「ㄹ」形（はだかの形式と「～タも同然だ／～거나 마찬가지로」という明示的形式）が用いられる一見特殊な現象を取り上げ、それが、話者の未実現事態に対する認識的完了である「心的パーフェクト」の概念を用いてメンタル・スペース的立場から説明できることを主張した。また、この「心的パーフェクト」が発話に導入されやすい環境を考察し、特に動詞の意味性質の観点から、具体性の高い動詞より具体性の低い動詞のほうが「心的パーフェクト」になじみやすいことを示した。

次に、このような現象が日本語だけでなく韓国語にも見られることを示すとともに、「心的パーフェクト」の表示には、日本語と韓国語の間に若干の違いがあり、韓国語の方が許容範囲が広いことも示唆した。

未来の事態に対して、話者はその事態の限界達成後のスペースに立ち入って、限界達成スペースを振り返ることで、主観的判断としての「心的パーフェクト」を表示することになる。ただし、事態の限界達成に至る過程の明白性、事態の限界達成に対する時間的接近性、手持ち根拠の量や質、事態への直接関連性（ひとごとの場合よりわがごとの場合）などが、発話の中に「心的パーフェクト」性を取り込む場合の主な影響要因といえよう。

今後、話者の完了認識である「心的パーフェクト」の概念が、他の言語にも適用可能か否か<sup>5)</sup>をさらに検討していく必要がある。

## 第8節 むすび

注)

- 1) 韓国語の過去形は「末尾音節に-ト, -ㄷ以外の母音を含む語幹+-았-/末尾音節に-ト, -ㄷを含む語幹+-았-」という形をとる。母音語幹の場合は縮約がおこることがある(하다(する)の過去形は하였다→했다となる。)(井上・生越 [1997, p 48])
- 2) 金水 [1990] の談話のモデルを参照しながら, 若干の修正を行った。事態の認識過程が相互連結していて, 関連性を持つことを表面上に表すために螺旋形を用いている。
- 3) この空間での限界達成点は, 未来空間の限界達成点が複写されたものとして見なすこともできる。
- 4) 各用例の許容度表示は, 日本語については, 曹 [1995] のアンケート調査結果および神戸大学大学院国語学専攻の日本人学生の判断に基づいており, 韓国語については, 曹 [1995] のアンケート調査結果ならびに筆者の内省に基づいている。
- 5) 他言語への適用可能性と関連して, 英語や中国語にも似たような現象が見受けられることは非常に興味深い。次にいくつかの例を取り上げてみよう。
  - (51) (発表は数日後であるが, 試験後の自己採点で, かなり出来がよかった場合)
    - a これで, 合格したぞ。
    - b 이 정도면 합격했어. (韓)
    - c 考上了。(中)
  - (52) (登山で遭難したが, レスキュー隊のヘリコプターが見えた時)
    - a あ, たすかったぞ。
    - b 아, 살았다. (韓)
    - c 得救了。(中)
  - (53)

ルーク 「I can't kill my own father」  
オビワン 「Then the emperor has already won.」(英)〔スターウォーズ  
3〕日本語訳は, {もう皇帝が勝ったも同然だな。}